

# 八重山歴史研究會報

第 26 号

編集・発行 八重山歴史研究会  
発行日 二〇〇五年七月二三日  
事務局 飯田(石垣市立図書館) 5八三 三八六二  
得能(市史編集課) 5八二 一二五二  
題字 坡名城泰雄氏

遺跡の立地、遺物から見た古

琉球(近世への移行)(試案)

島袋 綾野

1. はじめに

現在、通称2号線の街路改良工事に伴い、近世以前の古琉球の文化層が多く見つかっている。今回は、便宜的に古琉球という言葉を使ったが、考古学上ではいわゆるグスク時代、スク時代、新里村期・中森期など、様々な名称で呼ばれる時代である。この時代には文字記録が少なく、考古学的な成果による歴史説明の手がかりが期待されるが、正直、八重山の考古学は長い間、その停滞期から抜け出せずにいるのが現状である。

本報告は、拙稿「近世琉球における『村』と『遺跡』」(島袋二〇〇五)及び投稿中の「『パナリ焼のイメージ』を考え

る」から抜粋して行う。

2. 考古学上の「遺跡」と「村」

考古学上で遺跡と捉えられている部分は近世の概念でいう「村域」からすれば、「集落」部分である。ところが、八重山諸島で総遺跡数の八〇%程度を占める古琉球の遺跡は近接しながらも点在している傾向があり、その中には住居と埋葬地が含まれ、集落とその周辺で生活が完結しているようにも見える。これは、調査範囲をひとつの遺跡と捉えがちな考古学上の遺跡名(調査地点名と同義になっていることがある)にも不備はあるが、それ以前に、ひとつひとつの集落が小集団を形成し点状にしているということを、改めて考えなければならぬ。八重山の村の名称が記載される文書の中で最も古いのは「宮古八重山両島絵図帳」(琉球国絵図史料集編集委員会ほか編一九九二)である。一六四七年の正保国絵図

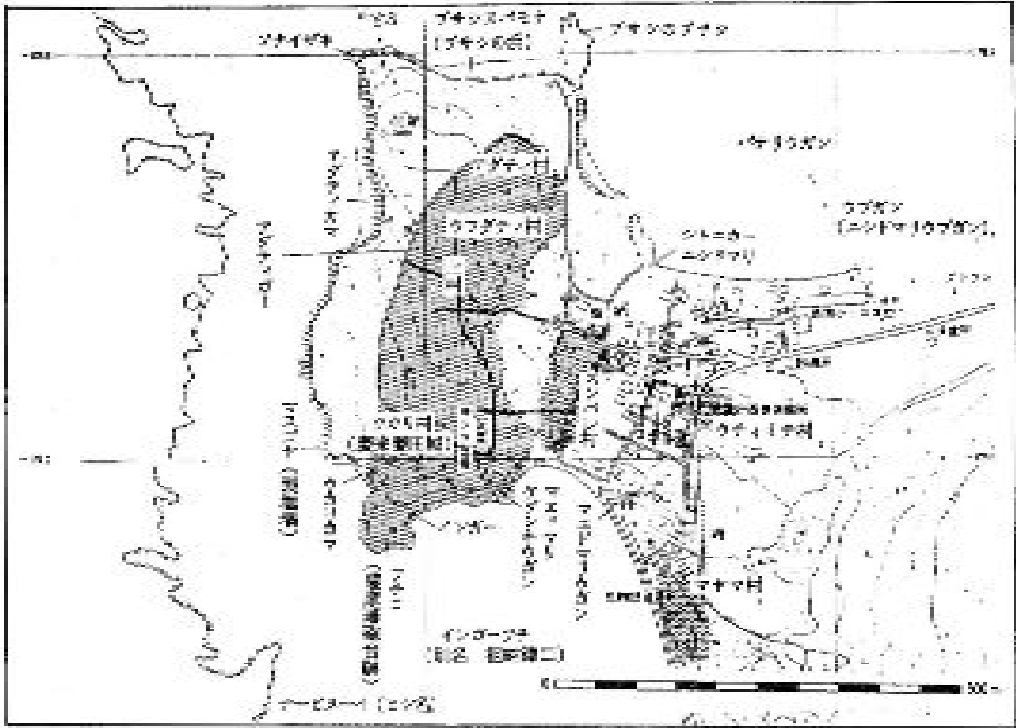
に付いたこの絵図帳には、宮古・八重山諸島の多くの村名が記されているが、古琉球の遺跡はそれよりも遙かに多く見つかっている。先に述べたように遺跡と村は異なる範囲で捉えられている。それは考古学が文化財保護法で言うところの埋蔵文化財を対象とする学問であり、人々が生活した痕跡である遺物包含層が残らない限り、その空間は調査対象外であることから仕方がない。しかし、古文書に現れない村の伝承が八重山各地に残っているのは、「遺跡」という観点からとても興味深いことである。

例えば、大浜村については伊波寛氏の考察のほか（伊波一九七七）、フウスク村（＝カンドウ原遺跡の範囲）とフルスト原遺跡についての考察や近世の大浜村になる以前の伝承の村の存在についての報告もある（石垣市教育委員会一九九一）。一九九一年に石垣市教育委員会から発刊された『史跡フルスト原遺跡保存整備基本計画策定調査報告書』によれば、大浜村は「一七世紀以前に古い集落が集まって大浜村が誕生した」とあり、フスク（＝フウスク）村・フルスト村・サキハラ村・コルセ村・ホームマ村・ハエホームマ村という六つの古村落が地図上にプロットされている。これらのうち、遺跡として捉えられているのは、フウスク村（カンドウ原遺跡）とフルスト原遺跡である。このような小さな村に関する伝承は、

西表島の祖納半島や崎山半島にもある。石垣金星氏の報告では（石垣一九九一）、祖納半島周辺には上村・下村があり、それぞれ上村には「アダテイ村」「ウフダテイ村」「ウカリ村」があり、現在の祖納集落が形成されている下村にも「スンバレ村」「マヤマ村」「ウティンチ村」があつたとされている。つまり近世の村にいう慶田城村（大村）に属する祖納村（小村）があり、さらに祖納村の範囲に、アダテイ村・ウフダテイ村・ウカリ村・スンバレ村・マヤマ村・ウティンチ村という村の名称が伝承として残っていることになる（第一図）。このうち、遺跡として確認されているのは、上村の遺跡を包含した上村遺跡と、慶来慶田城遺跡（ウカリ村）、マヤマ原遺跡である。

このような伝承の村は、近世以降の「村」の範囲とある程度重なって人びとが同地に住み続けた結果、恒常的な攪乱があるとと思われる。それでもなお、石垣島だけでもかなり多くの「遺跡」が発見されているという事実がある。このことは、その遺跡が何村か、というよりも古琉球の八重山の人々の生活を考える上で、小集落がいくつも点在しているということが考古学では重要である。

先に古文書にはないが、確認された遺跡が多いと述べた。これらの遺跡といわゆる近世以降の概念的な村や遺構とがり



ンクする部分がある。この境界がじつは考古学者が入りたがらない領域である。

### 3. 古琉球から近世への変化

#### 遺跡の存続年代

古琉球から近世へ、八重山の遺跡はどのように変化したの  
 だろうか。先述のように、伝承の面からは小さな村が大きな  
 村に統合されていく中で、近世の「村」になっていったと言  
 われている。考古学上の遺構の面からは、生活の変化よりも  
 集落形成の変化のほうが大きかったのではないかと考えられ  
 る。そして、その変化の波は数回訪れていて、その第一波  
 が一六世紀前半ではなからうか。例を挙げれば、フルスト原  
 遺跡、花城村跡遺跡、新里村西遺跡、下田原城跡、マシユク  
 村跡など、これらの遺跡は出土及び表面採集で得られる遺物  
 から、一六世紀以前の遺跡であることが分かっている。上記  
 の遺跡は、すべて石積遺構を持つ遺跡である。これらの遺跡  
 は一四世紀〜一五世紀頃に全盛期を迎え、一六世紀の前半で  
 終わってしまうという事実は興味深い。話は飛躍するが、例  
 えば、与論城遺跡は一四〇〇年頃築城説と一五〇〇年代築城  
 説があるが、遺物は一五世紀〜一六世紀のものに集中してい  
 る。一説によれば北山王の三男王舅が築城途中に北山が破れ、

その後、尚真王の次男が渡島して完成させたという。つまり一時的に権力抗争の中、築城を中断していたのである。そして、首里に關係するグスクだけが残っていくことになる。時代は変わるが、同じ事が八重山でも考えられないだろうか？例えば廃城令ならぬ廃グスク令のようなものがあり、石積を持つ集落を閉鎖に追い込むという力が働いた可能性はどうか。現在、八重山の考古学では石積を持つ遺跡も、いわゆるグスク的なものではなく、集落であると考えられている。しかし、そこに住むものがどのような暮らしをしていたかは首里にとつては關係なく、ある種のリーダーシップがなければ積み得ない石積は、管理下に置く上では不要なものである。そのようなことを考えたきっかけは、祖納上村遺跡である。同遺跡は現在のところ、八重山で唯一、石積を積み直したり移動したりしながら、古琉球から近世まで包含層が残る石積を持つ遺跡である。上村遺跡は石積を積み始める前の包含層が確認されており、その上に石を積み始め、さらに近世になつて集落を拡大しながら広がっていく。なお、八重山諸島の古琉球の遺跡では、石積を持つ遺跡は少なく、ほとんどは平地型的集落である。それが、近世になると、屋敷囲の石積みをまた積み始める。しかし、古琉球の頃のような高い石積ではなく、現在の囲いとほとんど変わらないスタイルが現れて

くるのである。この上村遺跡の事例は、点在していた集落を屋敷囲いを持つ近世集落的なグリッド内へまとめられていった結果と考える。同様に、フルスト原遺跡なども一六世紀前半でほとんどの遺物が消失し、現在の大浜中学校附近に屋敷が集中したことも、近世におけるある種の集落移動として捉えてよいように思うのである。

別の視点から見れば、例えば蔵元の建設という問題がある。蔵元が建設される時に、その周辺だけ集落の動きがあったように見える。例えば竹富島カイジ浜遺跡であるが、無土器期の終末から古琉球へと連続した層が確認されている。しかし、近世の層は第1層の「旧表土」と表現された部分のみで、遺構は確認されず、遺物も少量である。明らかに住居址と考えられる下層の文化層とは異なり、炉跡や柱穴などの遺構が見つかっていないことから、生活臭がなくなっている。カイジ浜遺跡に隣接して、竹富島の蔵元跡がある。石垣島の事例はどうか。発掘調査が行われた登野城の蔵元跡遺跡では、古琉球の生活層の海側をカットし、土地造成を行つて蔵元を建設している。また、周辺の遺跡も複数の官衙があつたせいか、古琉球の層は多く見つかっているが、近世の集落跡と思われる遺構は、ほとんど確認されていない。この遺跡の包含層の状況から、両蔵元の周辺は土地接收のような形で、民間の家

屋を排除して敷地を拡大していったのではないだろうか。とすればそれに伴う集落の形態変化があるだろう。八重山博物館北側など、2号線沿いの遺跡調査ではそのような集落の形態変化についても興味深い。

実は考古学においても一六世紀〜一七世紀前半というのは、「わかりづらい世界」である。そして、この頃に遺跡の形態を変える第二波があったのではなからうか。これまでの緩やかな変化ではなく、政治的に村落形態を変えていく中で、考古学が扱う遺構が壊され、再造成をして新たな村の形態を形作っていった時期であると思われる。先述の蔵元周辺の近世生活層の欠落もこの第二波の範疇だと考えられる。

### 土器も変わる

古い書物を読めば、古琉球の土器も、近世の土器もすべてパナリ焼と報告されている。しかし、現在、八重山考古学の研究成果から、これらの土器はパナリ焼（写真1）とは区別され、二〇〇三年に刊行された『沖繩

写真1 パナリ焼



県史 各論編二『考古』にも、「パナリ焼と中森式土器（パナリ焼の前代の土器：註筆者）とは明確に区別されなければならぬ」と考える」（金武二〇〇三）と述べられている。パナリ焼の初現は一七世紀初頭と考えられている。先述の上村遺跡の調査において（沖縄県教育委員会一九九一）、古琉球から近世にかけて上下層で異なる型式の土器出土を確認し、相伴する輸入陶磁器などの年代から一七世紀という年代が得られた。中森式土器とパナリ焼が一部重なりながら、層序で先後を確認した八重山諸島で数少ない遺跡である。

パナリ焼が出現する前、八重山諸島には中森式土器以外にも型式名（編年上で分類するための名前）が違う土器が存在する。無土器期の終わりから入ってくる滑石製石鍋を模倣した新里村式土器（第2図）や、新里村式土器より発展したピロースク式土器（写真2）、そして中森式土器（写真3）である。中森式土器の後半、一六世紀に近いところで鉄鍋を模

第2図 新里村式土器

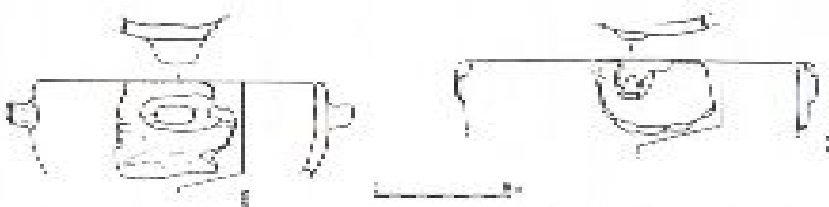
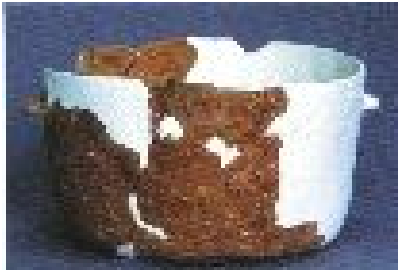
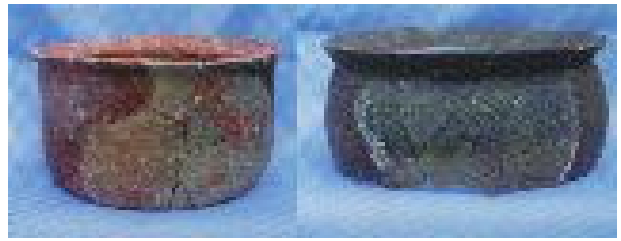


写真3 中森式土器



では、パナリ焼とはどのような焼物であろうか。実は、考古学上ではほとんど検討されていない。器種以外の特徴としては、海浜性の砂を利用し、土器の断面が黒くなり表裏面が赤褐色になるというサンドウィツ

写真2 ビロースク式土器



做した土器も出現する。これらは総括して八重山式土器と呼ばれることもあるが、型式学的な先後関係が捉えられており、パナリ焼もその延長線上に位置する。パナリ焼は中森式土器までは見られなかった器種(甕、壺、香炉など、器の種類)が登場するようになる。特に中森式土器まではほとんどが煮炊きを利用する鍋類だったのに比べ、圧倒的に壺型土器が増える。これは鉄鍋の普及によるものだという指摘もある。しかし、初現が一七世紀ということもあり、近世になってから形を変えた土器とも言える。

手状を呈することがあげられる。また、器表面の調整痕からなんらかの回転台を用いた形跡が伺える土器もある。ここで『沖縄大百科事典』から「パナリ焼」(新城一九八三)を一部抜粋して紹介しよう。

竹富町新城島で一八五七年(尚泰一〇)ごろまで造られていた土器質の焼物。新城島をパナリと呼ぶところからこの名称がある。その起源は明らかでないが、一説によると、昔、中国人が新城島に漂着してその技法を伝えたといわれる。その製法は一種独特で、蔓草やタブノキの粘液を土に混ぜて捏ねあわせ、轆轤を使わずに、手びねりで成形し、さらに蝸牛や貝肉の粘液をすり塗って形を整え、露天でカヤヤスキの火で日用品のほとんどが造られており、王府時代は貢物として認められていたようである。(後略)

筆者はよく言われている蝸牛を土器作りに利用するということには否定的である。それに加え、サンドウィツ手状になるためには、土が有機物を多く含むもので、かつ粘土になるものでなくてはならない。じつはその条件をよく満たすのが、畑などに利用された土である。さらに、新城島だけで焼かれたか、ということも否定する立場を取りたい。これまで八重山諸島全域で発見されたパナリ焼の流通量から考えた場合、使用する粘土の量、さらに、もしも田畑に関係する土を利用

したのであれば、一〇数個の土器を製作するにしても新城島では死活問題である。また、土だけではない。焼物の製造には相応の水も必要とする。移動先の島で土器作りに適した土がない場合でも、すでに調査された素地土（粘土に砂などの混和材を混ぜて練った成形前のもの）を船で運び、移動先の島で焼いた可能性を指摘した論文もあるが（比嘉一九九八）、もし安全な運搬方法として、素地土を運び移動先の島で焼くという事であれば、ことさら、島内消費以外の目的で新城島にすべての土や混和材を持ち込み、さらに燃料までもを大量に確保して焼くという理不尽さを払拭できないのである。

しかしながら、古謡などが残すように「新城」という島もしくは村がその生産に関わっているという前提で見れば、得能壽美氏が指摘する通耕による島を越えた村有地の在り方などから（得能一九八五、二〇〇三）、新城村の人びとがその製作に関わる情報・技術を持って海を移動し、通耕地として土地勘があり、土・混和材・燃料の調達が可能な地域、かつ、流通ルートである西表島を中心として、原材料豊富な石垣島などの島々で焼いたと考えるのは飛躍しすぎだろうか？ または、水運搬の必要が生じる新城島において、水の漏らない容器は生活になくはないものだろう。村人はなんらかの方法で水の漏らない土器の焼き上げに成功した。陶磁器の総

称としての「瀬戸物」と同じように「パナリ焼」の名称が残ったのか。まだ土器の胎土を科学分析した例は少ないが、分析を増やしていくことで、どの土でどのように焼かれたものなのか、絞り込みが可能になるだろう。

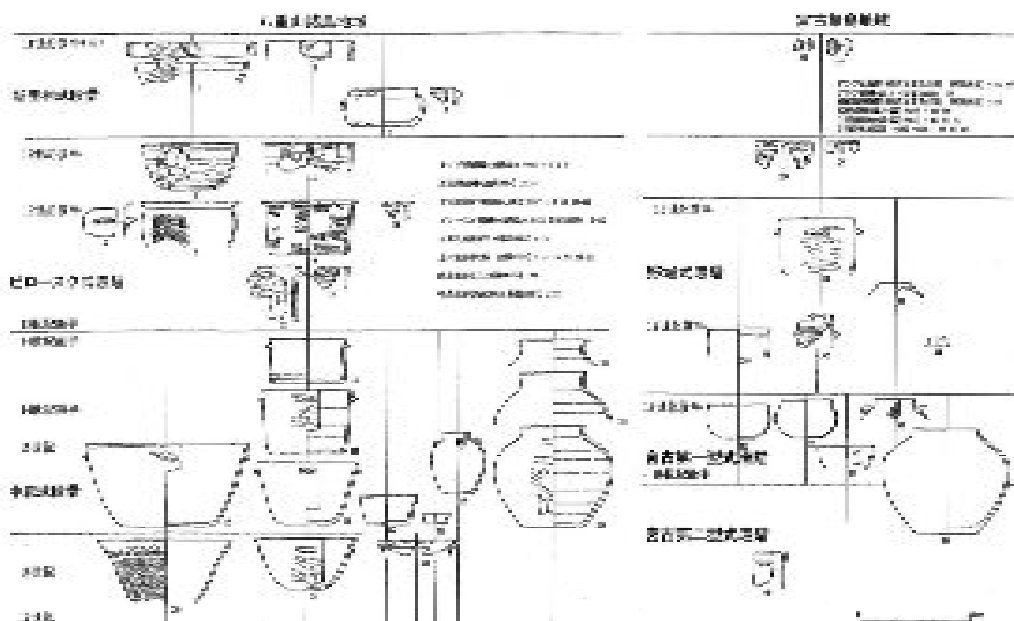
いずれにしても、考古学から純粹に遺物を見るには、まずは伝承などの情報を排除して、「パナリ焼」という土器そのものを見なければならぬ。

#### 4. まとめにかえて

ただ掘るだけでは分からない 遺物を分析する

考古学の調査は掘って報告書を出すと終わり、掘ればそれだけで資料が増える、と思われてきた。しかし、掘るだけでは八重山の考古学は全く発展しない。例えば、先述の中森式土器やパナリ焼など、遺物についての研究が進まなければ、その遺跡がいつの時代のもので隣接する遺跡との先後関係はどうか、といった議論は進まない。たしかに報告書が出ないことも問題であるが、近年、八重山は専門外でありながら調査に入り、その中で出された報告書は中森式土器、パナリ焼の区別さえなされぬまま、「土器」として一括で報告されている。写真や所見で見れば、在地のもので判断できずに、輸入陶磁器で年代観を得るしかない。しかし、陶磁器などの焼

第1表 新里貴之氏による土器編年



物は伝世する。そういった年代観の違う遺物が同層で出土した場合、やはり頼るのは土器など在地の遺物である。同じ環境で焼かれた場合、中森式土器とパナリ焼は混和材がほとんど変わらない。それでも器種・器形、破片であれば器面調整や焼成、素地土など総合的な要素でそれらの分類は可能である。例えば縄文土器は大きく文様で分類される。八重山の土器は先史〜近世に至るまでそのほとんどが無紋の土器であるが、だから分類できない、というのは理由にならない。ではどうして無紋が多かつ、外来品の数が少ない弥生土器で編年が進んだのか、そういった批判にぶつかるからである。古琉球の八重山の土器を分類・編年したのが第1表である。先述の新里村式土器、ピロースク式土器、さらに細かな分類が進められている。同じように見える土器にも型式学的には違いがあつて、それを中国製陶磁器の編年と照合していくことで、その土器編年はより正確になる。自戒の念をこめて言えば、現在、八重山の考古学で最も遅れ、そして八重山の考古学が停滞している一番の原因は、発掘数が少ないことでも、報告書が出ないことでもなく、考古学の「学」の部分が進まないことである。おそらくこの部分が進めば、八重山の古琉球から近世に至る集落形成や人びとの生活がより良く見えてくるだろう。

(紙面の都合上引用文献は割愛した)